

本を選ぶ

NO.441 2022年(令和4年)2月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒114-0002 東京都北区王子 4-23-4 TEL=03-6908-4643

●<ろん・ぼわん>乳香 続

●司書の眼 第47回

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

乳香 続

朝日新聞朝刊の池澤夏樹の連載小説『また会う日まで』が581回で完結した。一昨年の8月から始まった連載はほぼ毎日、1年半に亘る。意外にも新聞連載小説を欠かさず読み通したのは初めてだった気がする。子どもの頃通った毎週の日曜学校で過ごした時間を思い出し、また主人公が幼少期を過ごした土地が自分の生まれ育った場所と重なったという親近感もあつてのお付き合いだった。

小説の中で聖書の一節が引用されると、こちらも古ぼけた聖書を引っ張り出して、頁を繰る。細かな活字を追えば、初めての場面もあり、また懐かしく思い出される一節もあった。なにせ半世紀以上の月日が流れているから記憶は定かではない。しかもマタイが誰でヨハネが何者なのかも知らずに過ぎた。

さて、イエスが馬小屋で生まれた際、東方から星に導かれてやってきた博士たちがささげた贈り物として聖書に登場する“黄金・乳香・没薬”（「マタイによる福音書」2.11）。前号では乳香についてふれたが、黄金はともかくとして、没薬とは一体何なのか。同じく聖書を繰ると、あった。「ヨハネによる福音書」（19.38以下）には、イエスの亡骸を埋葬する際、没薬と沈香を混ぜたものとともに亜麻布で巻いた、とある。

乳香がそうであるように、没薬も樹脂つまり樹木の樹皮を傷つけると流れ出る樹液が空気にふれて固まったもの。芳香物質であるとともに殺菌・抗菌作用の効能が古くから知られている。4000年前の古代シュメール人が用いていたという記録があるそうだ（『スピリットとアロマセラピー』カブリエル・モーゼイ著／前田久仁子訳／フレグランスジャーナル社／2000年）。

また、没薬は英語ではミルラと呼ばれ、あのミイラの語源となったといわれる。ミイラをつくるために、死体の保存処理に欠かせない抗菌作用と腐敗臭を弱める匂い成分が必要だったのだろう。ドナルド・P・ライアンは「遺体の内側と外側に脂と樹脂を塗りつけ」るミイラ職人の仕事ぶりを紹介している（『古代エジプト人の24時間』市川恵里訳／河出書房新社／2020年）。脂と称するのはたぶん杉油、樹脂とあるのが没薬の類と推測できる。「ヨハネによる福音書」で登場する没薬と沈香もミイラづくりと同様の役割を負っているはずだ。強い防腐作用と芳香が求められた結果だった。古代の人たちは薬用植物の成分をよく理解していたとかがえる。沈香はジンチョウゲの仲間、白檀と並ぶ香木として名高く古より焚かれてきた。熱を与えて薫らせると得も言われぬ薫りが立つ。日本の香道でも古くから伝わる聞香においてたびたび登場すると聞く。

信者ではないが、聖書と賛美歌が手許に残してあった。第405番「また会う日まで」が記憶の隅から蘇り、気付けば折りにふれて口ずさむまでになった。歌えるのは1番だけだけれど。（埜村 太郎）

司書の眼 第47回

—— 2022年のはじまり ——

鷹野 祐子

新年になって、日経新聞の「交遊抄」にJT生命誌研究館館長の永田和宏氏のコラムがのり、所属の理事長が朝から来られて、「まったく、はずかしい一面が全国紙にばらされてしまったよ」と笑いながら、親友永田先生の話がされていた。JT生命誌研究館が発行している季刊「生命誌」は、毎回その特集も付録の工作も楽しみな機関紙であるが、1993年に岡田節人先生を初代館長として発足し、少し前まで中村桂子氏が館長をされていた。今年新年の世田谷区広報報紙に中村氏と区長との対談が掲載されていて、中村氏の所属が違ったので「おや？」と思ったのを思い出した。2020年4月から永田先生が館長をされているとのことである。永田先生と言えば、歌人であり細胞生物学者で、奥様は歌人の河野裕子氏、長男は歌人の淳氏、長女の紅氏も歌人であり生化学研究者である。理事長によれば、永田氏は奥様の乳がん闘病生活を支え、一時期大変であったようだが、やっと落ち着いてきたみたい、というお話しである。河野裕子氏は、与謝野晶子の再来ともいわれる戦後の日本を代表する歌人だそうだ。同僚もうんうんとうなずいているが、私は俳句と川柳と短歌の区別もつかないので、「へーそうなのですか」と話しを合わせて聞いていた。

そういえば、短歌がなんだかわからなかったころ、「みそひともじ」といわれる5・7・5・7・7の31音でうまく日常や青春を歌った俵万智氏の「サラダ記念日」(河出書房新社／1987年)が大ヒットしたことがあった。一見なんのこともないつぶやきが本になっていて、今でいえば140字のツイートみたいな内容なのである。

『この味がいいね』と君が言ったから七月六日はサラダ記念日
大きければいよいよ豊かなる気分東急ハンズの買物袋

いや、あまりにも普通の出来事をフツの言葉で言っているだけでしょ、と当時は思ったものである(今もちょっと思う)。そういえば東急ハンズがホームセンター最大手のカインズに買収されましたね。渋谷に行けば用がなくても東急ハンズにいき、どこを探してもなかったものが東急ハンズにだけはあった時代も、インターネットでAmazon、楽天、Yahoo、Googleで検索すればどこかにはある時代に変化してしまった。みんなには必要ないけど誰かにはとっても必要なロングテールな物を揃え、都心の地代を払って専門知識のある店員さんを待機させておくのは大変だったと思う。カインズホーム側は、「新たなDIY文化の共創」をキーワードにプライベートブランドの開発に力をいれていくということなので、楽しみにまっていたい。

年末に角川武蔵野ミュージアムに行ってきた。目当ては浮世絵劇場 from Parisと本棚劇場である。チームラボの森のアート空間を併設していたので、それにも興味があったが、距離的に暗い時に行くのは大変だったので、こどもの振替休日を利用して平日日中に行ってきたのである。角川武蔵野ミュージアムは、見学施設によってチケットがわかれている、行ったことがないところに行くか行かないか決めるのも面倒なので、入場可能エリアなら再入場できる1DAYパスポートを予約しておいた。平日大人で3000円と強気である。結果的には浮世絵劇場が素晴らしかったので、満足することができた。会場内に椅子もあるので3回くらい見たかもしれない。小さな子や小学生でも楽しめる。浮世絵劇場の後、マンガ・ラノベ図書館に行き、一人できたら帰れなかったなあ、と後ろ髪をひかれつつ4階へ。エディットタウン、ブックストリート、エディットアンドアートギャラリー、荒俣ワンダー秘宝館、本棚劇場、アティックステップ、ワークショップルーム、レクチャー

ルーム、と区切りがないようで区切りがあるスペースが連なっている。実際本棚劇場はアティックステップで5階につながっていて、武蔵野ギャラリー、武蔵野回廊になってしまう。まさに、「回廊」という感じなのである。荒俣ワンダー秘宝館は、「荒俣宏氏監修の驚異の部屋」というコンセプトで、まさに大変興味深いものが、ヴィレッジヴァンガードやドン・キホーテのように並んでいて、つつい購入してしたい！と思ってしまうが、非売品のものが多い。一日いてお腹いっぱいになれるので、角川武蔵野ミュージアムに行くなら、時間に余裕があるときをお勧めしたい。長々と角川武蔵野ミュージアムの説明に費やしてしまったが、そのときエディット アンド アートギャラリーで企画されていたのが、「俵万智展 #たったひとつの「いいね」『サラダ記念日』から『未来のサイズ』まで」だったのである。

俵万智氏は、実は本名というのにびっくりだが、お父様がサマリウムコバルト磁石を発明した物理学者である。前述の「サラダ記念日」にも、

東北の博物館に刻まれし父の名前を見届けに行く

という短歌が収録されている。「サラダ記念日」は、神奈川県立橋本高校教師時代に出した第一歌集で、280万部のベストセラーになった。高校はこの2年後退職した。彼女の歌集を読んでもらうと、とりわけ恋愛の歌が多いのがわかると思うが、その後結婚をせず息子さんを授かり、仙台、石垣島、宮崎と転居して暮らしている。俵万智展でも、お子さんを読んだ歌がたくさんあり、「サラダ記念日」から約35年たった彼女の軌跡を垣間見ることができた。会場は大きな白いオブジェを覗いた先にモニターがあったり、お互いに覗きあえたり、天井から薄いネットのようなものがたくさんつられて

いたり、ピンクのハートがあったりする。ひとつひとつ読みながら会場をうろうろして、子育てを楽しんできた様子が手に取るようにわかる。2003年に生まれたお子さんももう来年は二十歳。今後はどんなことを歌にしてくれるのか楽しみである。

悪い癖で、永田先生のことをつらつら検索していくと、どうしても奥様に関するものがヒットしてくる。永田先生は、終戦後の1947年生まれ、嵯峨野高校から京大理学部物理学科に進む。大学在学中に京大短歌会にはいり、そこで京都女子大学在学中であった河野裕子氏に出会う。永田先生が河野氏を滋賀の家まで送っていき、帰りの終電がなくなり下駄で帰ったという逸話がある。そのころの二人の歌に、

たとへば君 ガサッと落葉すくふやうに私を
さらつて行つてはくれぬか 河野
あの胸が岬のように遠かった。畜生！ いつ
までおれの少年 永田

短歌というものは、赤裸々に心のうちを表現する。一連の短歌を読んでいると、一瞬ひるんでしまうような心情の生々しさに耐えられなくなる時があるが、短歌を読む人にきくと、短歌を詠んだときにはもう自分から離れてしまうのだそうだ。その感覚はどうにも理解できないが、そうして二人は歌を詠みあい、72年の永田先生との結婚直後に第一歌集『森のやうに獣のやうに』を発表した。永田先生は京大卒業後、森永乳業に勤務していた1975年に第一歌集『メビウスの地平』を出版、その後京大にもどり、1984年アメリカ米国立癌研究所(NIH)に行く。家族を帯同していくのが当たり前の時代、小学校高学年の長男淳さんはで現地校で苦労したと記されている。河野氏は心を痛め、転居などしつつ、思春期の子どもたちと向き合った日々を2年過ごす。淳さんは帰国後も中学

校への再適応で苦しみ、近江兄弟社中学に転校して落ち着いたという。そんな時期の河野氏の短歌には、こうした子どもたちを抱えつつ、母として強くあらんという状況が読み取れる。

河野氏は、中学時代には短歌を始めている。高校時代にはその感受性の鋭敏さ故か、自律神経の病気で1年休学している。河野氏は結婚後、第一歌集でのデビュー以来、長きにわたり短歌界の重鎮として活躍され、永田先生と共に「宮中歌会始」選者も務めた。2000年9月乳がんが見つかった。河野氏が左わきにしこりを見つけ、永田先生に「これ何？」と聞いてきた。診察結果を知人の医師から電話で聞いた永田先生は、河野氏的心情を考え、「なるべく普通に接することこそ本人のためだ」という思い違いをする。河野氏54歳であった。ここからの闘病のすさまじさはいろいろところで書かれているので、ぜひ一度読んでみてほしい。「がんなど、なんでもない」。なるべく普通の生活をしようと思う永田先生は、研究に忙しい日々を過ごし、片や人一倍繊細な感情を持ち永田先生に依存していた河野氏は共感をしてほしかった。

何といふ顔してわれを見るものか私はここよ
吊り橋ぢやない 河野
ああ寒いわたしの左側に居てほしい暖かな体、
もたれるために 河野
今ならばまつすぐに言ふ夫ならば庇つて欲し
かつた医学書閉ぢて 河野
平然と振る舞うほかはあらざるをその平然を
ひとは悲しむ 永田

この時期精神のバランスを崩した河野氏は、少しずつ異常な行動をとるようになる。夫の浮気を疑い、執拗に夫をなじり、ヒステリックな発作をこすようになる。テーブルの上に包丁を突き刺し、夫を罵ったこともあったという。激情的な爆発は定期的に繰り返され、家族は苦しみぬいた。2004年、永田先生はかつて京大で同僚であった精神科医の木村敏氏のところに河野氏をカウンセリング

に連れていく。木村氏は河野氏の話をつただ聴いていたということだが、3年、4年たつうちに河野氏は安定した精神を取り戻し、家族は安堵した。そして手術をしてから丸8年たった2008年、がんが転移・再発する。永田先生は再び河野氏の精神が壊れていくのではないか、と思ったのだ。しかし河野氏は冷静に現実を受け止め、短歌を作り続ける。

一日に何度も笑ふ笑ひ声と笑ひ顔を君に残す
ため 河野
一日が過ぎれば一日が減ってゆく君との時間
もうすぐ夏至だ 永田

ある賞の授賞式のスピーチで河野氏は言った。「私には残された時間がほとんどありません、願わくばあと三年ほしい。そしたら歌集をあと三冊だして茂吉とならぶのに」。あと3年あったらといった2か月後に河野氏はなくなる。最後はホスピスではなく、緩和ケアを望み在宅で家族が看取ったそう。介護中長女の紅さんは、河野氏の声を録音し、家族はつぶやくように河野氏の口からでてくる短歌を口述筆記して残した。最後に不思議そうに家族を見まわす妻。口元がかすかに動き、何かをつぶやき始めた。永田先生が「歌だ」といって、すぐさま原稿用紙に書きとめた。10分ほどで数首ができあがり、おしまいはこの歌だった。

手をのべてあなたとあなたに触れたきに息が
足りないこの世の息が 河野

その後、永田先生は河野氏を失った悲しみから抜け出すのに何年も必要だったという。40年も相愛歌を歌い続けた相手がなくなってしまった喪失感はどうほどのものだろう。「河野裕子読本 角川『短歌』ベストセレクション」(角川学芸出版/2011年)では永田先生、淳さん、紅さんの3人による対談記録「家族団らん—河野裕子の思い出」が収録されている。死後1年にこんなに冷静に本

人を語れるなんて、信じられなかった。永田先生はその後数年たって、河野氏の乳がんが見つかったときに彼女の話聞いてあげる時間をとるべきだった。その不安を聞いてあげればよかった。ただ横にいて同じように悲しんでくれる人がいるというそれだけで、人は安心できるだろう、と語っている。

Do the hokey pokey

2021年にノーベル物理学賞を受賞した真鍋淑郎氏のインタビューをテレビで見た方も多いただろう。その時壁には井上靖の詩「渦」の一節が飾られていた。もう一つが白鳥省吾の詩だった。これらの書について憶測がネット上にたくさん見つけられるのだが、どなたの書であるかの言及は見つからなかった。受賞がきまった時に「彼女の助けがなければ賞をもらうのは不可能だった」と語っていた真鍋淑郎氏の奥様は、「彼女の作る料理はどれも素晴らしい！」と言ってもらったほどの腕前で、いったいどんな人なのだ、とやはり検索にいそしんだところ、表千家の料理講師、表千家同門会米国東部支部の地区長でいらっしゃることが分かった。それは本当に、本当にお料理が上手な人ですよ、真鍋先生。

今のNHKの連続テレビ小説「カムカムエヴリバディ」を毎日たのしく見ている。ラジオ英語講座とともに歩んだ祖母安子、母るい、娘ひなたの物語で、今は3人目のひなたの幼少期にあたる。安子は1925年生まれで戦前、るいは1944年生まれで戦中、ひなたは1965年生まれで戦争を知らない子供たちである。ちょうど1975年の「およげたいやきくん」ブームが懐かしいなあ、と思いつつ、回転焼きをたべていたのだが、真鍋淑郎氏は1931年生まれ、永田先生は1947年生まれ、理事長は1949年生まれ、とかなり時代がかぶっている。ああこの時代に育った人たちが偉業を達成してきたのか、と思う2022年のはじまりであった。今回、永田先生から河野裕子氏に至る資料を探し、読んでいるうちに何度も何度も落涙した。その後、河野氏が高校生時代に入院した時の主治医が木村先生であったと、木村先生が思い出したことも追記しておきます。

(たかの ゆうこ：医学系研究所図書室)

【訂正】本誌440号掲載の為貞貞夫氏の連載「鳥の目」の4頁最終段落に誤りがありました。正しくはサイトをご覧ください。
https://www.las2005.com/wp/wp-content/uploads/2022/01/hon_440.pdf

